

# 酒呑場遺跡の石皿と石棒

保坂 康夫

- 1. はじめに
- 2. 酒呑場遺跡C・I区の石皿

- 3. 酒呑場遺跡C・I区の石棒
- 4. 若干の考察

## 1. はじめに

酒呑場遺跡は、山梨県北杜市長坂町長坂上条にあり、山梨県埋蔵文化財センターによって4次にわたり10,400m<sup>2</sup>の発掘調査が実施された、縄文時代の集落址である。報告書はすでに刊行しているが（山梨県教育委員会1997・1998・2004・2005）、膨大な資料のため報告書からもれた資料について少しづつ資料報告を行っている（保坂2006、野代2008）。今回は、縄文時代中期の環状集落の1／2を調査したC・I区の石皿と石棒を取り上げた。石皿は、破片を含め合計385点も出土しており、本遺跡を特徴づけるものである。石棒は17点と少ないが、新津健氏により山梨県最古と評価されている藤内式期のものがあり（新津2008）、実測図などの資料報告がなされていなかった。

ここでは、まず、新資料の記載を行い、既報告資料を略述し、出土数量や分布、出土状態について検討したのちに、若干の考察を行いたい。

## 2. 酒呑場遺跡C・I区の石皿

ここで取り上げる石皿は、中央のスリ面を敲打により彫りくぼめたもので、大半は周囲も加工して楕円形の平面形、断面形となっており、非加工の大形自然礫にスリ面をもつ礫石皿と区別される。石材は地元の八ヶ岳産と思われる安山岩である。中央部に幅12～15cm程度の細長い凹部をもつものをI類、素材の平面のほぼ全体を広くスリ面とするII類の2種類がみられる。

### ① 新資料の記載

第1図はC・I区の石皿新資料である。いずれもI類である。完形品や文様があるものを中心に資料提示した。石材はいずれも多孔質の安山岩で、遺跡周辺を含め八ヶ岳山麓で採取可能な石材である。

1は、C区9住覆土中出土の文様をもつ石皿である。破損品であり、部品2点が9住内で接合したものである。接合状態の長軸方向の最大長が36.6cm、残存

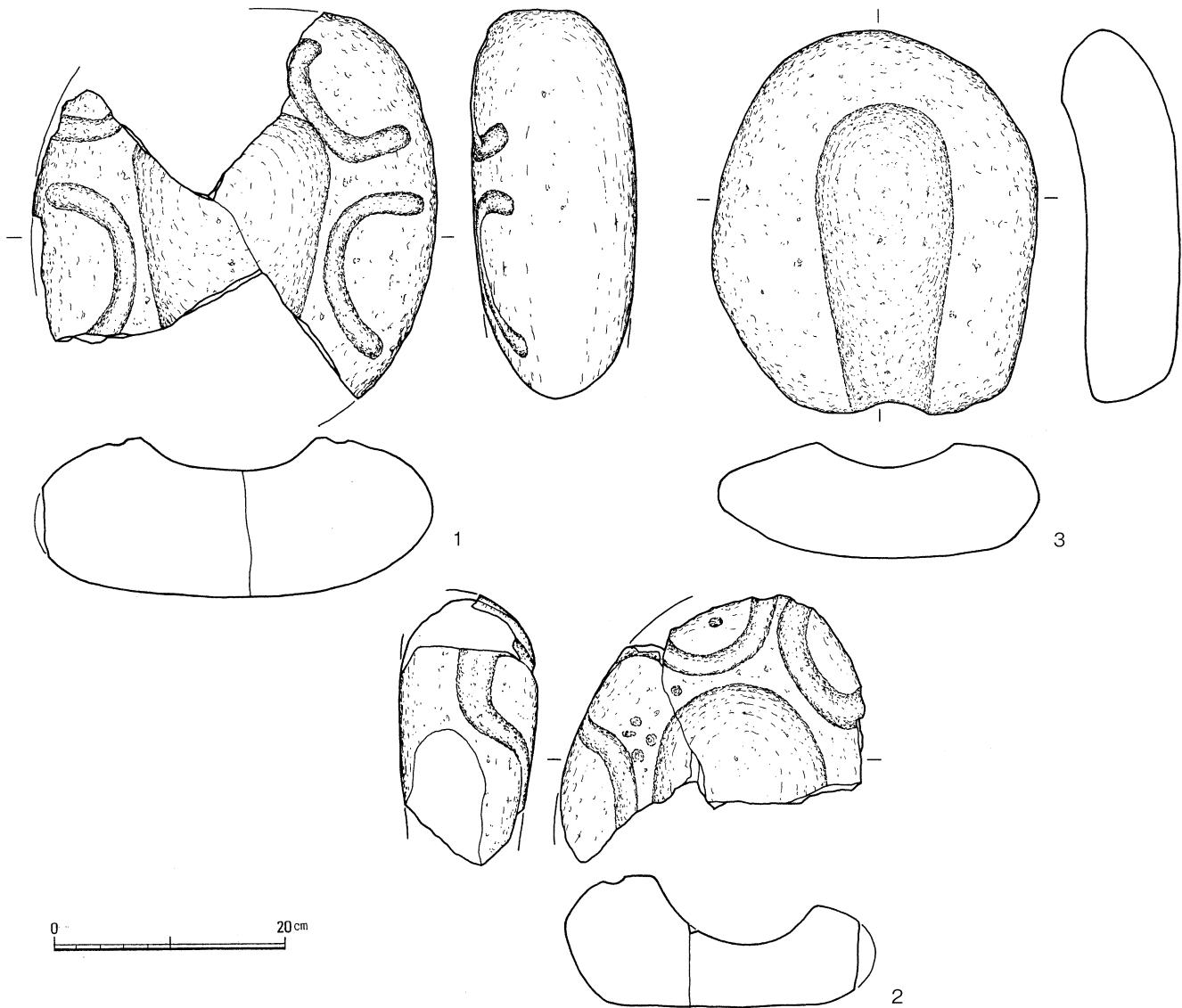
幅33.2cm、最大厚13.5cm、凹部の最大幅が15cm、深さ3cm、重さ15.6kgである。文様は4ヶ所にみられ、幅2cm、深さ2mmの断面が弧状に彫りくぼめた線により、凹部を背にしたC字状の文様が3ヶ所、1ヶ所が欠損により線のみが残存するが文様の配置状況からC字状の文様である可能性が高い。藤内式期。

2は、I区出土の文様をもつ石皿である。正面右側の56住覆土中と、左側のJ'-29グリッドから出土した部品とが接合したもので、接合距離は約15mである。上面からみると、1と同様に凹部を背にしたC字文のように見えるが、正面図左側面ではC字が連結して波状の文様となっている。幅2cm、深さ3mmの断面が弧状の線で、連続部分は幅が広く、深さ2mm弱と浅く彫込まれている。部分的にくぼみ石と同様なくぼみがみられるが、文様ではないと考えられる。現存幅25.9cmで、推定幅27.3cm、最大厚11.4cm、重さ6.4kgで、全体を敲打して整形している。凹部の最大幅が15cm、深さが最大5cmと比較的深く、かなり使い込まれていると思われる。なお、56号住居跡出土部分は、すでに報告書（山梨県教育委員会2004）で第227図2に報告している。藤内式期である。

3は、C区99住覆土中出土の完形品である。長軸33cm、最大幅28.1cm、最大厚9.8cm、重さ12.2kgである。凹部の最大幅が12cm、深さが最大2cmと比較的浅い。井戸尻式期である。

### ② 既報告資料の略述

石皿の既報告資料を第8図にまとめた。8～10がC区で他はI区出土である。5～7および9がII類で、他はI類である。5はI'-31グリッド出土で、長さ20cm、最大幅26.5cm、重さ2.6kgの小形品で、時期不明である。6はF'-27チ土坑出土で、長さ9.7cm、最大幅8.2cm、重さ0.21kgで、時期不明である。7は2号配石出土の後部を欠損するもので、長さ26cm、最大幅24.5cm、重さ6kgで、曾利式期である。9はC区74住出土のスリ面中央部が周囲よりくぼんでいる。石皿を全国集成し分析した上条信彦氏は、こうした石皿を他



第1図 石皿新資料 (1/6)

と区分して分類しているが（上条2007）、本遺跡では唯一これだけであり、Ⅱ類に含めた。長さ49.3cm、最大幅34.5cm、重さ25.6kgで、猪沢式期である。

I類については、8がC区E'-37グリッド出土で、長さ34cm、最大幅29.2cm、重さ8.8kgで、時期不明である。10はC区37住出土で、長さ41.6cm、最大幅36.8cm、重さ36.4kgで、井戸尻式期である。11以降はI区出土で、11がA'-32イ土坑（後部）と13住（前部）出土品が接合したもので、凹部周囲を平坦に加工しており、長さ43.6cm、最大幅30cm、重さ19kgである。土坑が新道式期、住居が曾利式期なので、新道式期と考えられる。12はI'-27グリッド出土で、長さ33cm、最大幅32.4cm、重さ15.8kgで、時期不明である。13はK'-30ヌ土坑出土で不定形な亜角礫を素材としており、長さ30cm、最大幅26.8cm、重さ10.6kgで、時期不明である。14は44住出土で、長さ30cm、最大幅27cm、重さ11.2kgで、猪沢式期である。15はE'-32イ土

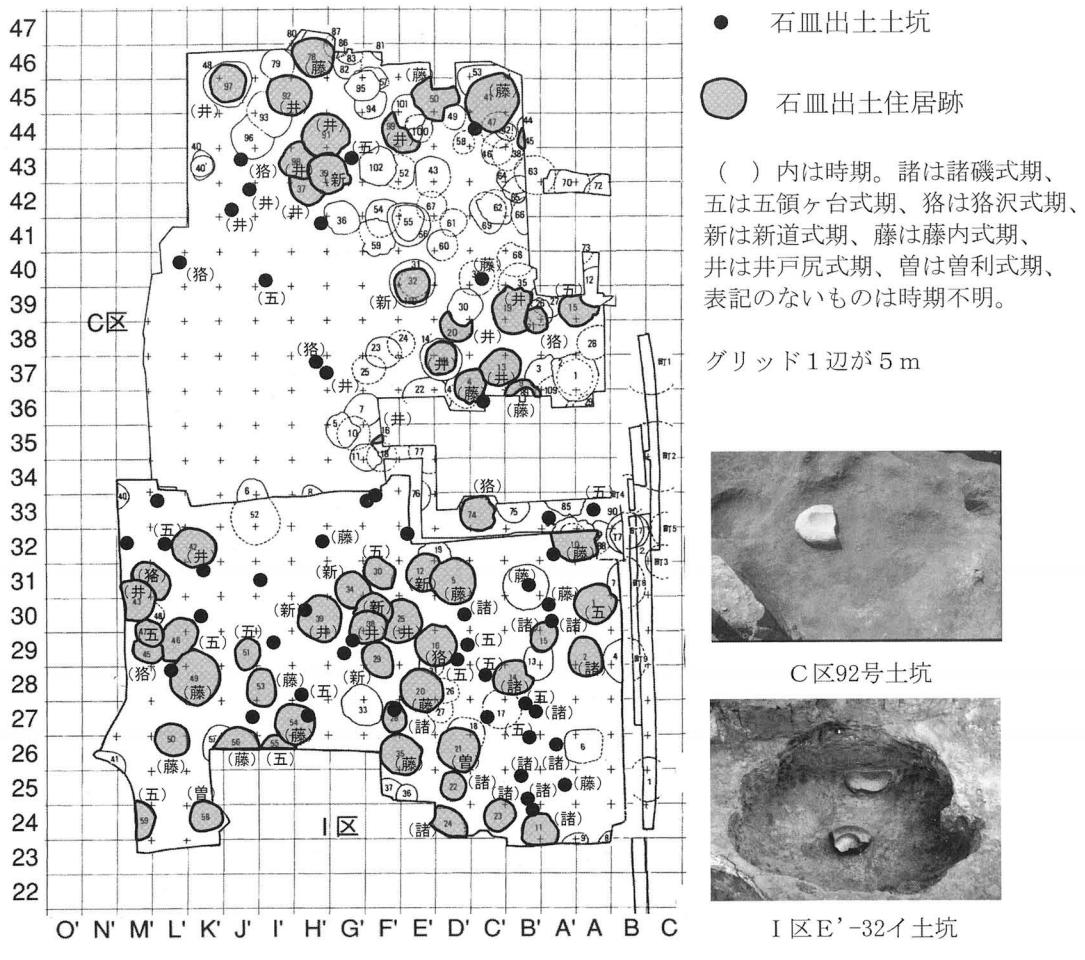
坑出土で後部周囲を欠損しており、長さ33cm、最大幅28.3cm、重さ12.5kgで、時期不明である。凹部が浅く、使用開始後間もないものと思われる。16は59住出土で、長さ35cm、最大幅25cm、重さ11.2kgで、五領ヶ台式期である。

#### ③形態的特徴

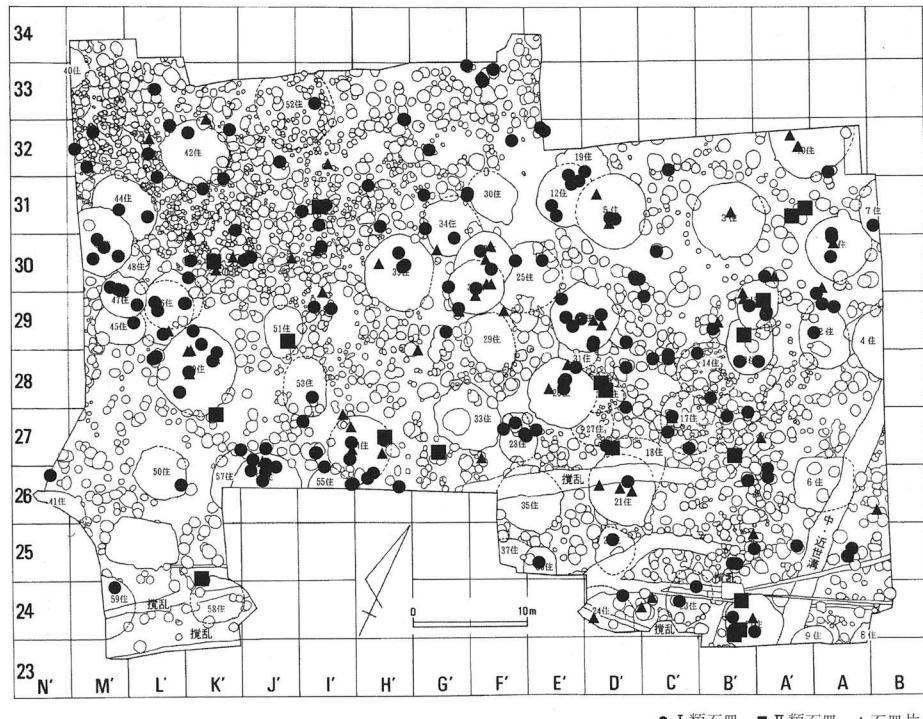
完形から小破片まで大きささまざままで、形態が把握できるものについてはⅡ類がC区で2点、I区では20点とⅡ類が若干確認できる程度で、ほとんどがI類である。完形状態の形態については直径10cm～30cm程度の小形品から長さ50cmほどの大形品まである。加工程度も、くぼみ部分をようやく加工しはじめて間もないものでごく浅いものから、かなり使い込んだらしく底部の厚さがごく薄いものまでさまざまである。

#### ④数量的特長

全体数については、C区では84点、I区では301点、合計385点である。I区が多いのは、小礫も含めて礫を



第2図 石皿分布図



第3図 T区石皿全点分布図

全て取り上げ、加工の有無を確認しているためである。

この個体数を検討すると、石皿が生活必需品と考えた場合、住居跡数以上の個体数が使われていたと考えられる。住居跡数はC区104軒（住居跡番号でカウント）とI区59軒で、合わせて163軒であり、その2倍強あることになる。接合する資料がかなりある可能性を示すが、1軒につき2個の石皿を保有すると考えると、部品がかなり欠落していることになる。欠落の理由については、人為的な要素もかなり含まれると考える必要があろう。

#### ⑤分布の特徴

分布について検討する（第2・3図）と、住居跡出土がC区では55点、I区では106点である。覆土中出土ではあるものの、住居跡によって出土数に違いがあり、最大はC区13住の13点があり、I区でも6点・5点といった出土数がある住居跡がある（第1表）。一方で、全く出土していない住居跡があるが、生活必需品と考えると、保有していないかったのではなく、廃棄の場としてその住居跡覆土が選ばれなかったと思われる。こうした住居跡覆土層の遺物保有量の差は、石皿ばかりでなく、土器や他の石器にもみられる。石皿数が多い住居跡には、後述する石棒出土住居もある場合が多く、廃棄物の数量の増加と同時に種類の増加もみられることになる。こうした構造が、比較的等間隔に40m前後の距離を置いて分布している状況は示唆的で、廃棄行為の性格を特徴付ける大きな要素と思われる。

土坑出土はC区では17点、I区では50点ある。大半が覆土中出土ではあるが、土坑底部から出土しているものもごく稀にみられる（第2図）。このように出土場所はさまざまであり、第2・3図にみるように全体に分散して出土している状況が把握できる。しかし、土坑のみが分布する集落中心部では、石皿の分布はみられない状況が把握でき、注目される。

### 3. 酒呑場遺跡C・I区の石棒

今回、石棒としたものは、大形石棒とされるもので（谷口・中村ほか2011）、円柱状で敲打痕が広く確認でき、断面最大径が15cm程度より大きく、デイサイトを石材とするといった条件にみあったものである。炉材に棒状素材が用いられ、石棒との区別が問題となるが、今回の検討のなかで、横断面の最大径が10cm程度と円柱形石棒より細く、敲打痕がほとんどみられない角礫を炉材として用いている状況を確認し、これと同様な角柱状デイサイト石材を炉材の可能性があるものとして排除した。

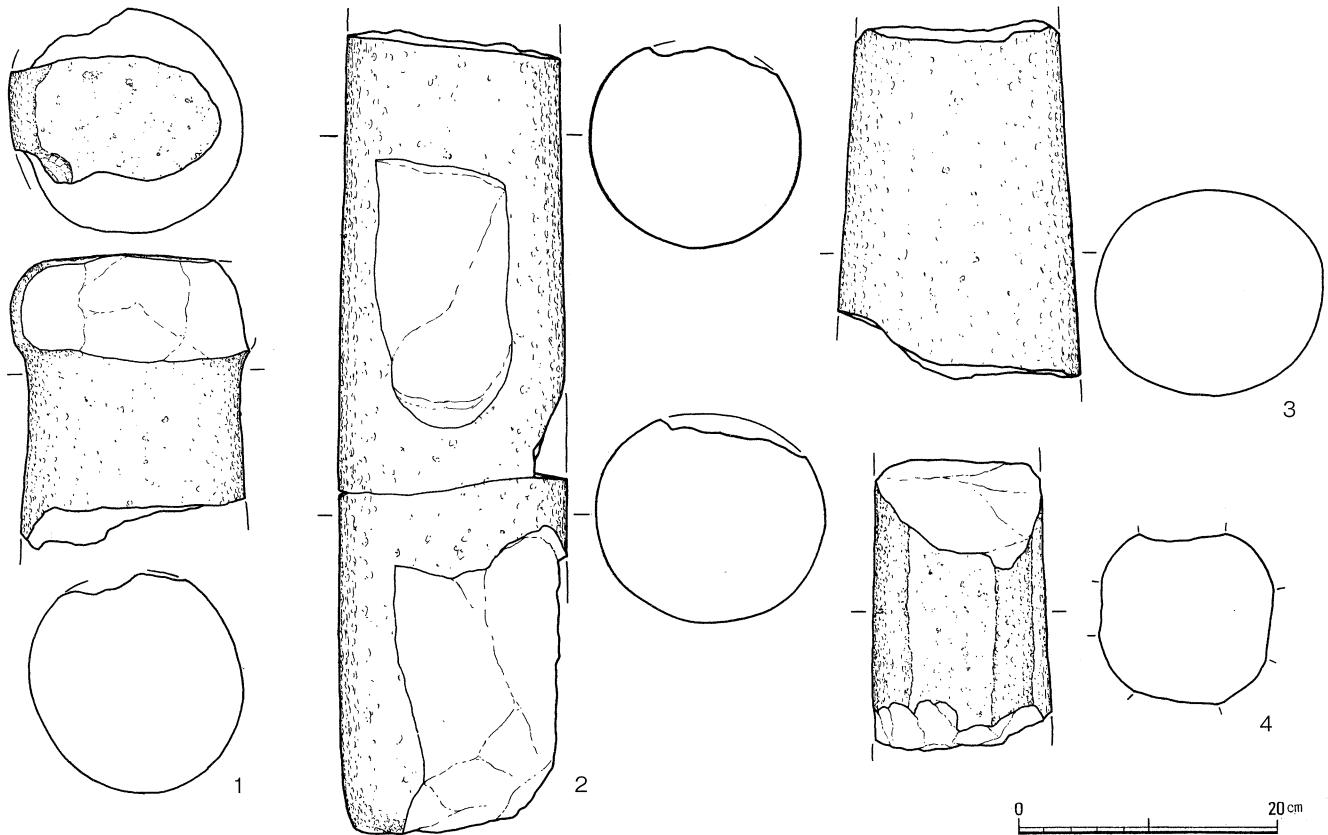
#### ① 新資料の記載

第1表 住居跡出土石皿数

C区 住居番号	時期	石皿 点数	I区 住居番号	時期	石皿 点数
04住	藤内	2	15住	諸磯	4
09住	藤内	2	16住	猪沢	5
13住	井戸尻	1	20住	藤内	6
14住	井戸尻	4	21住	曾利	5
15住	五領ヶ台	2	22住	諸磯	1
16住	井戸尻	1	23住	諸磯	1
19住	井戸尻	4	24住	諸磯	1
20住	井戸尻	1	25住	井戸尻	2
21住	猪沢	1	26住	諸磯	1
32住	新道	2	28住	諸磯	4
37住	井戸尻	3	32住	新道	2
39住	新道	2	34住	新道	2
41住	藤内	1	35住	藤内	1
45住	五領ヶ台	1	38住	井戸尻	6
50住	藤内	1	39住	井戸尻	3
74住	猪沢	2	42住	井戸尻	1
78住	藤内	1	43住	井戸尻	4
91住	井戸尻	2	44住	猪沢	1
92住	井戸尻	13	45住	猪沢	1
97住	井戸尻	3	46住	五領ヶ台	1
98住	井戸尻	2	47住	五領ヶ台	5
99住	井戸尻	4	49住	藤内	5
I区住居	時期	点数	50住	藤内	1
01住	五領ヶ台	3	51住	五領ヶ台	1
02住	諸磯	1	52住	井戸尻	1
05住	藤内	5	53住	藤内	1
07住	藤内	1	54住	藤内	3
10住	藤内	2	55住	五領ヶ台	3
11住	諸磯	5	56住	藤内	6
12住	新道	3	57住	五領ヶ台	1
13住	曾利	2	58住	曾利	3
14住	諸磯	1	59住	五領ヶ台	1

第4図はC区の石棒の新報告資料である。1は97住覆土中出土品である。長さ23.3cm、最大径17.7cm、重さ9.4kgで、有頭である。頭部周囲は、一部を残して大半が剥落している。井戸尻式期である。

2は、245号土坑出土で、既報告（山梨県教育委員会2004）の第167図2に片割れが接合したものである。S-30の遺物番号が付されている。長さ63.3cm、最大径18cm、重さ27.2kg。頭部側を欠損し、基部も折れ面の周辺部一部を敲打し丸みをついているものの、しっかりと加工ではなく、基部側を欠損後に一部加工を加えた可能性があり、本来の基部は欠損してい



第4図 C区石棒新資料 (1/6)

る可能性がある。五領ヶ台式期と本遺跡最古であり、大形石棒としては県内最古と考えられる。

3は、19住覆土中出土で、S-128の遺物番号である。頭部、基部両側を欠損している。長さ19cm、最大径12.6cm、重さ12.1kgである。井戸尻式期である。

4は、60住出土で、S-27の遺物番号である。角柱素材の稜部を敲打したもので、頭部、基部両側を欠損している。長さ22.9cm、最大径14.6cm、5.8kgである。藤内式期である。

第5図はI区出土の石棒の新報告資料である。1はJ'-31ヲ土坑出土の石棒である。藤内式期で、新津氏が中期石棒としては県内最古として評価した資料である（新津2008）。有頭で基部側を欠損する。頭端部は平坦で自然面を広く残しており、周囲を敲打し、一部に剥離痕もみられる。長さ46.6cm、最大径16.4cm、重さ16.8kgである。出土状態は、土坑中位レベルに横になっていた。35.4kgと巨大で平板な非焼け自然礫が土坑中央に底から浮いた状態で水平にあたかも蓋をするように置かれており、その横に添わせるように横に寝かされていた。その上位に小形の浅鉢形土器が出土している。この浅鉢形土器が藤内式期であり、その時期のものと判断した。

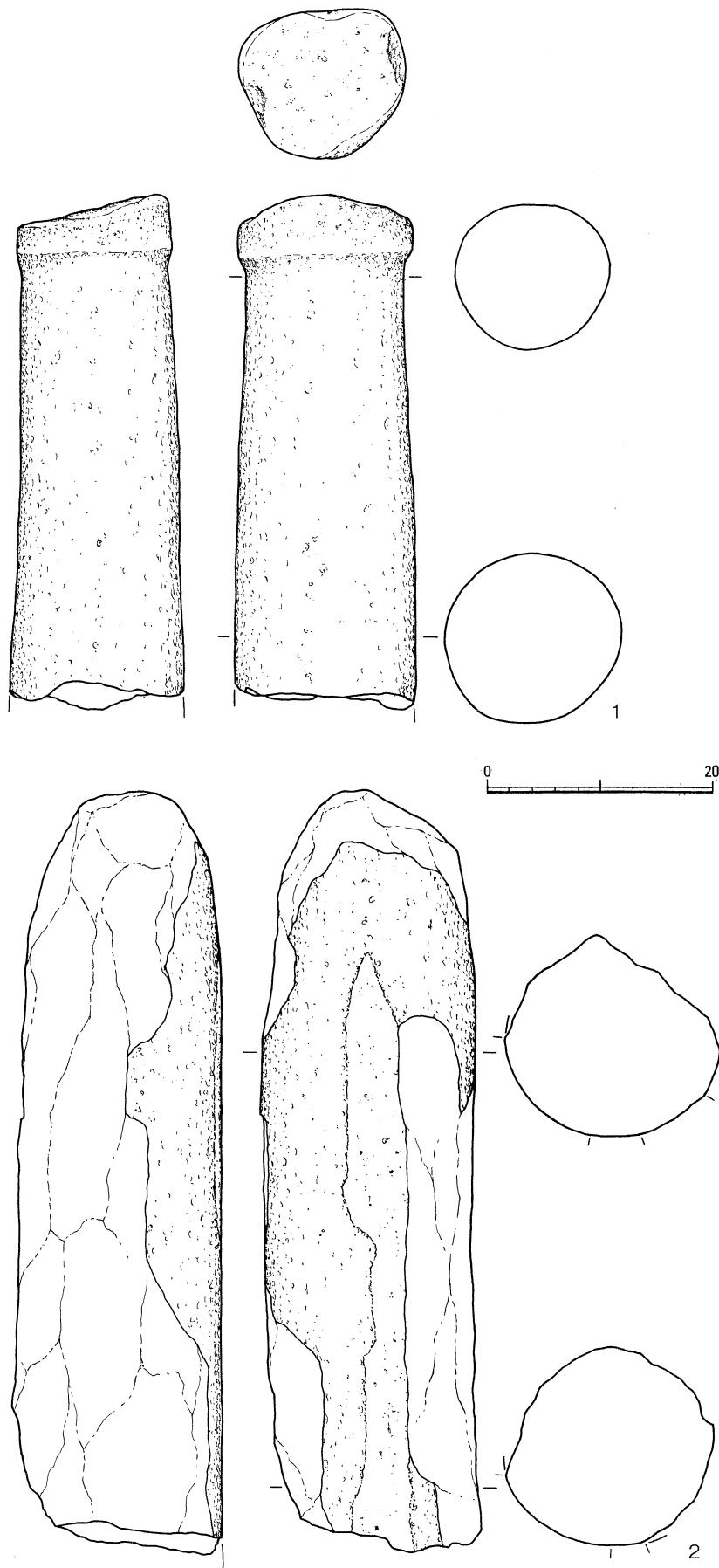
2は20住覆土中に横になって出土した。全体が剥落しており、図上方がすぼまる状況がみえることから

先端側と判断したが、頭部の状況は不明である。敲打により丸く加工されているが、長軸方向に自然面が残存しており、第2図4のような角柱素材を加工したものである可能性が考えられる。長さ68.5cm、最大径19.1cm、重さ33.5kgである。藤内式期である。

## ② 既報告資料の略述

石棒の既報告資料を第8図にまとめた。1がC区203号土坑出土の有頭石棒頭部で、長さ26.5cm、最大幅25.5cm、重さ8.7kgで、時期不明ある。2はI区49住出土の有頭石棒頭部で、長さ16.2cm、最大径14.5cm、重さ5.4kgで、藤内式期である。3はC区92住出土の上下を欠損するもので、長さ57.5cm、最大径29.5cm、重さ23.2kgで、井戸尻式期である。4はI区B'-26イ土坑出土の上下を欠損するもので、長さ24cm、最大径16.2cm、重さ7.4kgで、時期は不明である。石棒中位のレベルで近接して曾利式期の土器小片が出土しているが、土坑形成期のものとは思われない。大形石棒の出現時期は五領ヶ台式期であるという指摘（谷口・中村ほか2011）や、本遺跡内での出現時期の状況が同様であることから、この資料を含め石棒は五領ヶ台式期以降と考えられる。なお、この石棒の出土グリッドが既報告では間違っており、今回報告で訂正する。

このほか、C区では60住（藤内式期）内ピット、



第5図 I区石棒新資料 (1/6)

79住（新道式期）覆土中、91住（井戸尻式期）からそれぞれ上下欠損破片1点、20号土坑（新道式期）覆土中から有頭石棒1点、I区5住（藤内式期）覆土、L'-28号土坑覆土からそれぞれ上下欠損破片1点が確認されている。

以上から、C・I区の石棒は、五領ヶ台式期からみられ、猪沢式期のものは確認できないものの、井戸尻式期まであり、藤内式期6点と井戸尻式期4点と両期のものが多く出土している。集落全体の状況ではないので、おそらく各時期内に製作され、廃棄にいたる石棒のライフサイクルがあったものと考えられる。

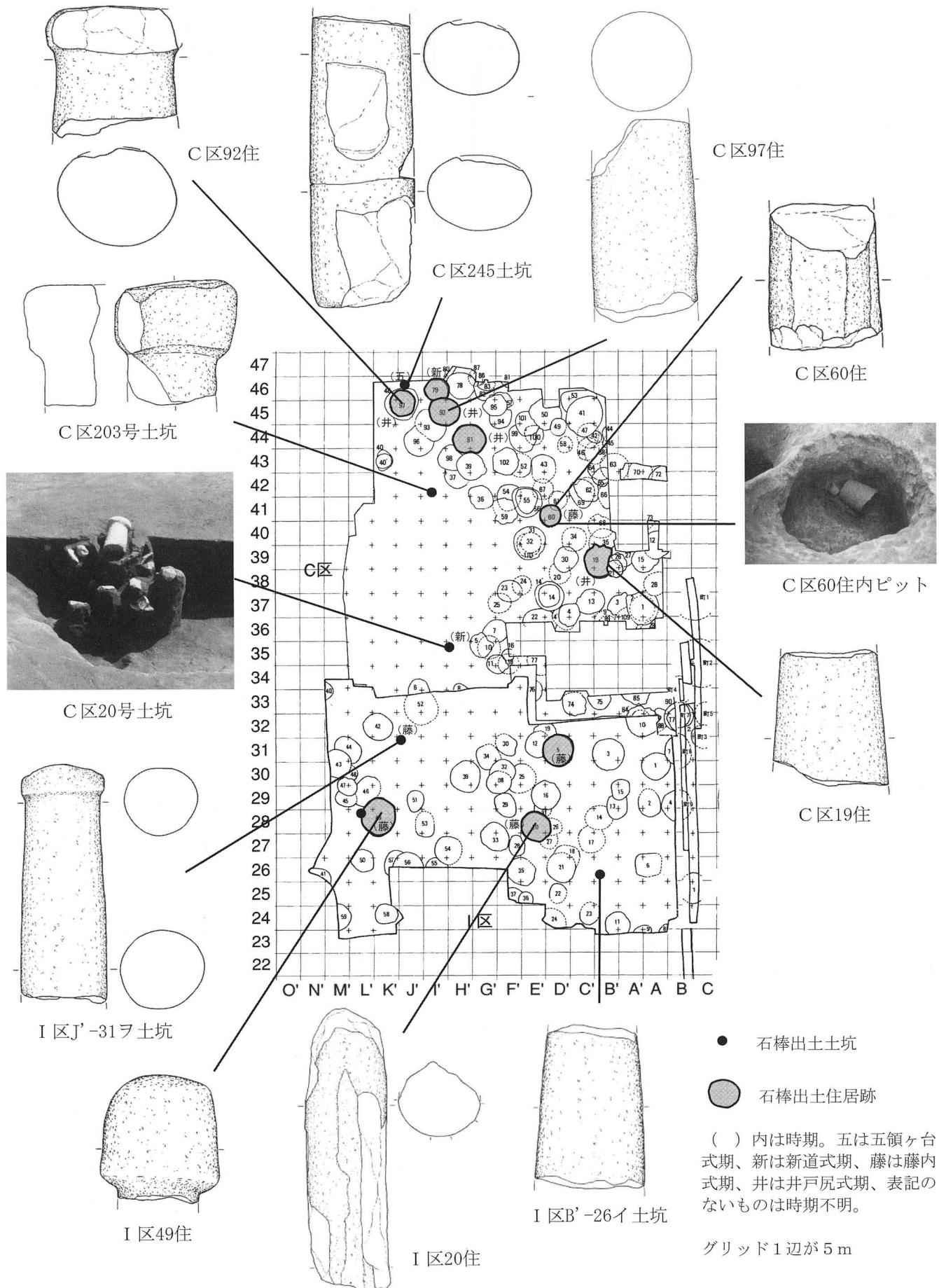
#### ③形態的特徴

本遺跡の石棒素材については、デイサイト石材は比較的軟質な素材であり、加工しやすい。I区20住の表面に自然面が残存し、おそらく角柱状の素材を加工したものと思われる。C区60住出土品（第4図4）は角柱状素材の角部分を敲打により丸くしているが、角柱の平坦面が中央に広く残されており、角柱状素材の旧状をよく留めている。

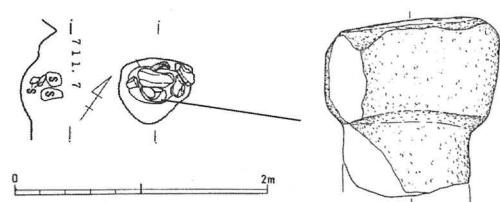
頭部については、平坦な自然面を広く残したくびれ部までの丈が低いものと、頭頂部も丸みを持つように加工され、くびれ部までの丈が長いものがある。加工が明瞭な無頭石棒が、今回の調査では確認されていない。同時に、加工された基部も出土していないが、今回報告した酒呑場遺跡の石棒はいずれも破損品であると考えておきたい。

#### ④分布の特徴

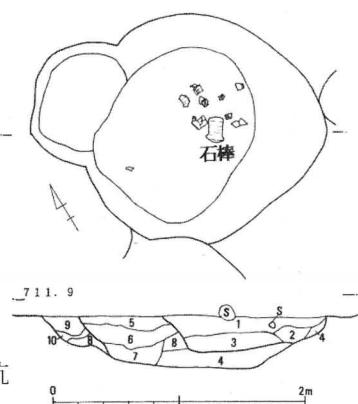
実測していない石棒を含めると、C区11点、I区6点の合計17点となる。I区については、報告書の記載のなかで26点と記載した（山梨県教育委員会2005）が、今回は炉材の可能性があるものを排除した。出土遺構をみると、C区北部から比較的多く出土している。実測していないものも含め、91住から2点、92住と97住から各1点の井戸尻式期の住居跡からまとまって出土している。また新道式期の79住から1点、五領ヶ台式期の245号土坑から1点がある。このほか、C区19住からも2点出土しているが、他では集中して出土する傾向はなく、相互に10～



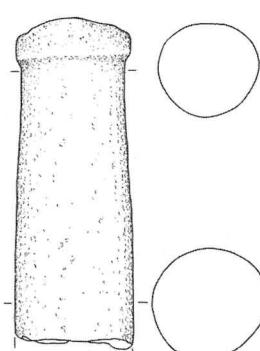
第6図 石棒分布図



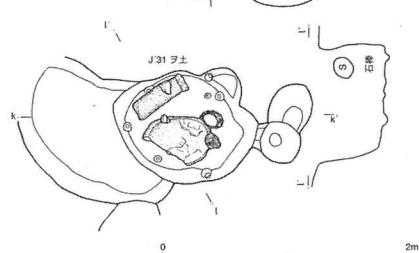
C区203号土坑



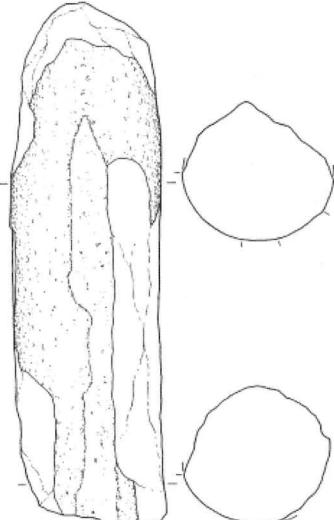
C区20号土坑



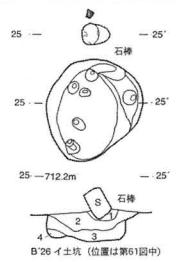
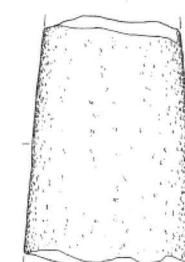
C区60住



I区J'-31ヲ土坑

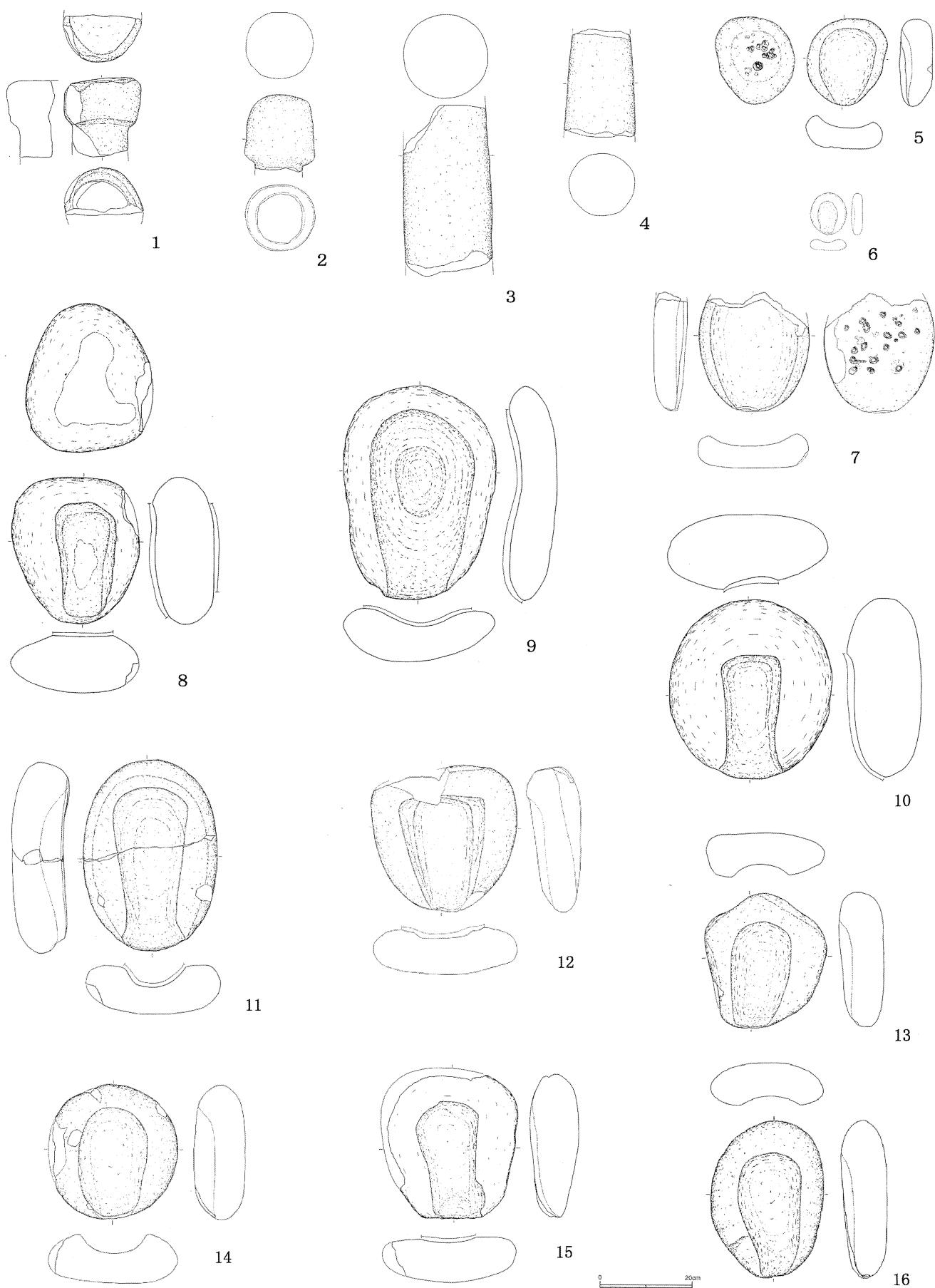


I区20住



I区B'-26イ土坑

第7図 石棒出土状態



第8図 石皿・石棒既報告資料 (1/12)

30mの距離をもちらながら分散して分布する傾向が読み取れる。

ただし、集落中央部には分布しない点は注目される（第6図）。調査を担当した野代幸和氏によると、集落中央部は土坑の分布はあるものの、遺物そのものの出土が希薄であり、トーテムポールのような柱状の構造物などを立て、共同祭祀などを行う空間ではなかったとのことである。

環状集落が形成された五領ヶ台式期、藤内式期、井戸尻式期のものがみられるが、井戸尻式期のものはC区、藤内式期のものはI区に多い傾向がある。土坑出土のものは、集落中央部に近く、住居跡分布の内側周縁部にあるものに頭部が出土する傾向がある。

##### ⑤出土状態の特徴

住居跡出土のものは、いずれも覆土中出土である。出土状況についてC区60住と、I区20住の写真を提示した（第6・7図）。実測図を提示しなかったが、住居跡内のピット内から出土したものがある（第6図）。C区60住の13ピットS-1と注記された円柱形石棒片である。

I区のB'-26イ土坑では、覆土中に立った状態で出土している。C区では、報告書の写真（山梨県教育委員会1997）から、第215号土坑であったかも石棒が土坑中央に直立しているような状況がみられるが、現物にあたった結果、棒状安山岩多孔石の欠損品で、石棒とは認定しなかった。直立した石棒は、A区で1点みられる（山梨県教育委員会1997）。A区は諸磯式期か曾利式期の住居跡しか分布せず、曾利式期の可能性が高い。また、重さ30kg以上の板状長方体の巨大角礫を直立させた立石が曾利式期のI区21住から出土している（山梨県教育委員会1998）。

石棒と石皿との住居跡内配置についてその関連性が指摘されているが（谷口2010）、住居内出土品はすべて覆土中出土であり、石皿と石棒の両者が出土した住居跡はあるものの、出土位置の構造性を論議する資料とはなりえない。また、土坑内で石皿と同居するものは見られない。

#### 4. 若干の考察

今回報告資料をみると、石皿・石棒とともにライフサイクルの最終段階で、割る行為が推定できる。両者は相当堅固な素材であり、相当強い意思をもって割ったと推定される。破片の大きさがさまざま、分割個数も一定しない。たまに完形が出土するものの、出現率は非常に低い。さらに、その部品を分散させることも指摘できる。このありかたは、土器、土偶などに共通する。一方、石鏃、石匙、石錐といった小形石器は、完形率が比較的高い。打製石斧は、使用に際して折れ

ることが多いと考えられるが、それでも完形率が比較的高い。使用過程終了後、割る道具と割らない道具の区別が存在するものと考えられ、縄文人の精神性を反映しているものと考えられる。

#### 引用文献

山梨県教育委員会1997『酒呑場遺跡（第3次）遺構編一前編』  
山梨県教育委員会1997『酒呑場遺跡（第1・2次）遺構編』  
山梨県教育委員会1998『酒呑場遺跡（第3次）遺構編一後編』  
山梨県教育委員会2004『酒呑場遺跡（第1～3次）遺物編一図版編』  
山梨県教育委員会2005『酒呑場遺跡（第1～3次）遺物編一本文編』  
保坂康夫2006「縄文時代の剥片剥離手法—酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から—」『研究紀要』22  
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
上条信彦2007「石皿と磨石」『縄文時代の考古学  
5 なりわい— 食料生産の技術—』同成社  
新津健2008「山梨の石棒～出土状態の整理と課題～」『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
野代幸和2008「北杜市（旧長坂町）酒呑場遺跡の土坑について—第1～2次調査（A～E区）を中心にして—」『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
谷口康浩2010「縄文時代の竪穴家屋にみる空間分節とシンボリズム」國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要2  
谷口康浩・中村耕作ほか2011『縄文時代の大形石棒—東日本地域の資料集成と基礎研究—』國學院大學研究開発推進機構学術資料館